広報 かみす
Kamisu public relations
2024年 5/1 No.413

神栖ディスカバリー File 11

特集

農業に吹く新しい風

ユーカリとぶどうへの挑戦

Pick up

2024年度区長を紹介します……P6～7
まちづくり懇談会……P8
かみす健康マイレージ……P11

農業分野における新しい挑戦。ユーカリやぶどうの産地化を目指す取り組みが始まっています。

市メールマガジンはコチラ

AR 広報かみすが動き出す
【COCOAR】アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。詳しくは14ページ
【COCOAR】

神栖ディスカバリー File 11

特集

農業に吹く新しい風

ユーカリとぶどうへの挑戦

いま神栖市の農業に新しい風が吹いています。地元産のユーカリでおしゃれなフラワーアレンジメントをしたり、地元で育った採れたてのぶどうを食べたり……。そんな楽しみ方を広げてくれるハサキ・グリーンファームズ研究会を紹介します。

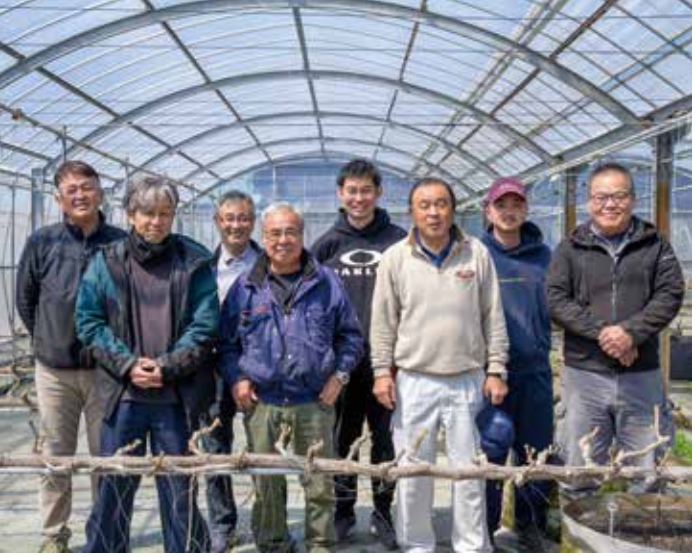
ユーカリの苗

大きく実ったシャインマスカット

千両・若松農家の新たな挑戦

神栖市は、日本一の千両・若松の産地ですが実はその陰で、出荷作業が年末に集中することや、生活スタイルの変化で年々需要が減っていることなど、生産者を悩ませている問題がありました。

そこで、年間を通じて出荷でき、フラワーアレンジメントに使いやすい枝もの花材を取り入れようと、有志4人で平成8年にイタリアンルスカスの栽培をスタート。その後、千両・若松の栽培農家に加え自営業者や会社員、新規就農者など仲間が増え、平成20年にはユーカリ栽培に乗り出しました。そのグループが〝ハサキ・グリーンファームズ研究会〟です。今では会員数も14人に増え、花きから果樹まで栽培品目をどんどん増やし、他の産地や市場からも注目されるような成果をあげています。今回は、神栖市の農業に新しい風を吹き込むハサキ・グリーンファームズ研究会に話を聞きました。



ハサキ・グリーンファームズ研究会の皆さん

ユーカリを使ったリース

鉢で育てるシャインマスカット

最近の大きな挑戦は、ぶどう栽培です。果樹栽培は初めての試みであり、しかも中心となったのは新規就農した菅谷亮介さん。非常に難しいとされるぶどう栽培をなぜ決断したのか、聞いてみました。

「5年前に、知人の紹介でぶどう農家さんを訪ねる機会がありました。そこで知ったのが根域制限栽培という方法です。地植えではなく鉢で育てるため、土を選ばないうえ水の管理もしやすく、しかも成長が早いんです。これなら神栖市でもできる、面白そうだと思ったのがきっかけです」

最初は50坪でスタートし、現在は250坪のハウスに100鉢以上が並んでいます。そのハウスを見て、イメージしていたぶどう畑の風景とまるで違うことに驚きました。鉢から出た幹は、上ではなく地面と平行に横へ伸びています。その幹から何本も上向きに枝が出て、小さな芽がつき始めていました。これからどのような作業をしていくのか教えていただきました。

「ぶどうは一枝に一房だけ実らせます。3月に枝を間引く〝芽かき〟、4月に必要な葉の枚数だけ残して枝を切る〝摘心（てきしん）〟、6月に混み合った粒を間引く〝摘粒（てきりゅう）〟をします。これらは、実にたっぷり栄養を送って一粒一粒を太らせるために欠かせない作業です。その後、袋かけをして収穫のときを待ちます」

こうして主力品種のシャインマスカットは、糖度約18度、1房約700グラムと立派に育っていきます。

本場の産地より一足早く ぶどうの食べ比べが楽しめる！

菅谷さんはシャインマスカットとクイーンニーナを中心に、10種類以上の品種を栽培しています。不動の

①収穫期を迎えたシャインマスカット　②小さいうちに粒を間引く　③鉢に植わったぶどうの様子を確認する菅谷亮介さん

人気を誇るシャインマスカットは、皮ごと食べられてパリッとした食感が特徴。上品な甘みと爽やかな香りが魅力です。また、クイーンニーナは大粒で高級感があり、甘くてジューシー。人気が上昇している注目の品種です。他にも、あづましずく、ナガノパープル、コトピー、マスカサーティーン、BKシードレス、サニードルチェ、マスカットノワールなどがあります。実は、品種を入れ替えたり、試しに栽培してみたりするのも、根域制限栽培ならやりやすいとのこと。鉢を替えればよく、翌年には収穫できるからです。

本場のぶどう産地の露地物より一足早く収穫できるのが強みで、早いものは7月中旬から販売が開始でき、シャインマスカットもお盆の時期に間に合います。菅谷さんはハウスの前にテントを立てて直売しており、昨年は約2100房を売り上げました。いろいろな品種の特徴を聞いて、食べ比べてみるのも楽しそうです。「今は直売のみなので、お客さまの声を直接聞くことができます。良いものを作れば評価していただける。それが一番のやりがいです」

(上)ロゴも作成。現在は直売所の販売のみ
(左)BKシードレス

現在ぶどう栽培をしている会員は2人ですが、近々もう1人増える予定。今後の展開が期待されます。

ユーカリのオリジナル品種〝シルバーウェーブ〟を送り出す

次に、多くの会員が手がけるユーカリについて皆さんから話を聞きました。耕作放棄地を利用して広げたユーカリ栽培は、わずか数年で全国屈指の生産量を誇るまでに急成長しています。その陰には、常識にとらわれない3つの英断がありました。

1つ目は、メリクロン苗(なえ)の導入です。これは親株の根や茎の先端部にある、細胞分裂の盛んな成長点を培養して増殖した苗のこと。葉の形にばらつきがなく、美しくて丈夫なユーカリが育ちます。しかし非常に高価な苗のため、既存の産地では導入されていませんでした。会では、銀色の葉が風に吹かれて波のようにそよぐ姿と、波崎の「波」から〝シルバーウェーブ〟と名付け、京浜市場へ出荷しています。

2つ目は、通年出荷です。他の産地では、3月に根本から数十センチの高さで幹を切る台切り剪定をして、秋まで出荷が止まるのが常識でした。そこで台切り剪定をせずに枝を切りながら出荷する方法を試み、通年出荷を実現。春の歓送迎会シーズンや5月の母の日に向けて、驚くほど注文が入ったといいます。

3つ目は、小ロットでの出荷です。これまで1箱に1メートル・100本入りのユーカリが慣例でしたが、50センチ・60本入りの小ロットとし、花屋さんが仕入れやすくしました。

波のようにそよぐシルバーウェーブ

菅谷栄一さんは「新規参入だから思い切ったことができたのだと思います。加えて、花き市場と長年の付き合いがあったことも強みとなりました」と語ります。会員は、実生苗を使ったグニー、銀丸葉、パルブラなどの品種も栽培。それぞれ葉の形や色、香りが異なり、ユーカリの楽しみ方を広げています。

要となる苗生産に挑む

さて、順調なユーカリ栽培でしたが、5年前に思わぬ事態となりました。それは、メリクロン苗の生産会社がアグリ事業から撤退し、苗を入手できなくなったのです。このままでは、樹勢が衰えた木を植え替えることができません。そこで菅谷さんは、自分たちで苗を作ろうと決めました。

「メリクロン苗の開発者や知り合いの力を借りて培養してもらい、私がそれを鉢に植えて養生し、会の仲間に分ける計画です。培養は非常に難しく、養生も一筋縄ではいかず、3年間はひたすら試行錯誤の連続でした。

シルバーウェーブ®

①ポットに植えられたユーカリの苗　②苗を作るための親木　③苗が小さいうちは温室で管理　④生育具合を確認する菅谷栄一さん

ようやく今年から、1カ月に200～300本のメリクロン苗ができるようになりました。ですが、まだすべての会員には行き渡っていません」

菅谷さんはユーカリ専用の苗温室を作り、メリクロン苗の生産拡大を目指して取り組んでいます。なぜそこまで頑張れるのか聞いてみました。

「シルバーウェーブの苗自体が優良固体で、市場評価も高いからだけでなく、愛着があるからです。一番始めに導入した苗ですし、自分たちが作り上げたオリジナル品種で商標登録もしています。今後、メリクロン苗の生産が軌道に乗ったら、まず波崎地域をシルバーウェーブでいっぱいにしたいですね。その後、もし他の産地から求められたら苗の販売をしようと考えています」

それも実現したら、波崎で誕生したシルバーウェーブが日本各地に広がっていくかもしれません。

枝もの産地化を目指して

ユーカリ畑を見せてもらうと、シルバーウェーブと一緒にコニファー類のブルーアイスが風に揺れていました。ブルーアイスは銀色を帯びた葉がクリスマスリースにぴったりで、最近ではブライダルなどの需要も増えて通年出荷しているそうです。

「ユーカリに限定せず、会員みんながそれぞれ苗を仕入れ、さまざまな枝ものを栽培するようになりました。ここ数年はミモザの需要が増えていますね。それから、イタリアンルスカスは昨年6万本出荷し、今では波崎地域の生産量が日本一なんですよ」と話す菅谷さん。

会員の皆さんが栽培している品目を尋ねると、千両・若松やユーカリのほかに、コニファー類、アカシア類、ロシアンオリーブ、ピット、ガマズミ、菊、コバノズイナ、オリーブ、スノーボール、シルバーアニバーサリー、ノバラ、オタフクナンテン等々、数え切れないほど名前が上がります。

〝枝もの産地化〟という大きな目標に向けて、これからも新しい品目が続々と増えていきそうです。ハサキ・グリーンファームズ研究会をはじめ、意欲的な生産者たちによって神栖市の農業の挑戦は続きます。

ブルグシュアカシア。
栽培品目は拡大中